

〔調査レポート〕

# 倫理と Integrity

——日本人を変える資質とは何か？——

海 野 裕

## はじめに——日本人は倫理的か

一般社団法人倫理研究所の研究センターが日本人の倫理意識を数量化しようという試みに着手してから15年が経過した。これは他の誰もどんな団体も取り組んでこなかった試みである。数字というものは普遍性、換言すれば客観性を持つ。もちろんそれは偏りのない調査設計や標本構成、標本数、また正しい統計的な処理がなされたものであればという制約はつくが、概ね普遍性あるいは客観性を持つと言ってよいだろう。倫理意識が数値化されるということ、さらにその数値に普遍性、客観性が宿るとした場合、どんな効用が期待されるだろうか。普遍性・客観性を持つ数値で倫理意識を語ることができれば、そこには様々な研究者たちがアクセスできる「場」が作られると筆者は考えた。「倫理学」は哲学の一分野であるが、個々の研究者が個別の問題意識に基づいて深掘りしていく研究だけではなく、倫理意識を数量化された「ある種の事実＝オブジェクト」として扱うことで、全く別の知見を持った研究者からより多くの解釈が導かれる可能性がある。それによって日本人の倫理についてより多く、深く理解していくことができるだろう。筆者にはそうした思惑があった。そしてそのビジョンは数量データが蓄積されるごとに実現に近づいている。

これまで何度も触れてきているので簡単に説明すると、調査の基本的な構成は「倫理コンセプト」に対する個人的共感性、社会的重要性、個人的実践度を

(2)

取得するものである。「倫理コンセプト」は古今東西の倫理、道徳、徳目と呼ばれるものを収集・分類し、編集して策定した。2005年の第一回調査の際は24のコンセプトであったが、現段階では33のコンセプトに拡大している。

33のコンセプトへの共感性はこの15年間の推移に着目すると微減傾向にある。だが倫理コンセプトへの共感性は総じて70%水準を超えており、その意味で日本人の倫理性は決して低くないと推察できる。倫理が倫理として有効なのは「個人として共感」できるだけでなく、多くの人がそれを「重要と考える」という共有性が不可欠である。よって倫理コンセプトの評価には「個人的共感性」「社会的重要性」の二軸を用いて分析している。「個人的共感性」と「社会的重要性」はちょうどシーソーのような関係にあり「個人的共感性」が低下すると「社会的重要性」が若干上昇してバランスを取っている傾向がある。筆者は倫理とは人間社会の恒常性（ホメオスタシス）ではないかという仮説を持っているが、概ね当てはまっているように感じている。

ここまで15年に亘り日本人の倫理意識の数量化に取り組み、その数値の推移を見てきた筆者は、ディテールはともかく全体として日本人の倫理意識が崩壊しているという認識は持っていない。むしろ一定水準で強固な倫理意識であると評価していた。この基本的な認識は変わらないが、いくつか問題意識がある。ある人が「倫理コンセプト」に共感したとして、その人が「倫理的」であると言えるのだろうか、というものである。その問題意識に応えるために設定した設問が「倫理的であろうとする意志」の測定であった。サンプル（対象者）の倫理性を評価する際に、「倫理コンセプト」への反応とは別にこの「倫理的であろうとする意志」もまた有用なのではないかと考えている。

## 果たして本当に日本人は倫理的か（ある異邦人からの指摘）

そんな折り、X（旧ツイッター）で、ある人物のツイートが目にとまった。SNSなのでこの方のプロフィールの詳細を知ることは難しい。だが筆者はこ